俳句的観点からの漱石と猫について

田村 米生

夏目漱石といえば「吾輩は猫である」。この国民的小説は、漱石が子規と親交があったので「ホトトギス」に連載され、その評判はその地位を不動のものとした。

そのため、誰しもが漱石と言えば先ず猫を思い浮かべることから、夏目漱石句集（二五〇〇余句）に猫の句がどれだけあるか調べてみた。猫の句は、たった十一句であった。その中には、私なりに見て滑稽句が散見される。

夏目漱石の猫の句　（夏目漱石句集より）

吾猫も虎にやならん秋の風　（詠年不詳）

恋猫や主人は心地例ならず　（明治二十八年）

猫も聞け杓子も是へ時鳥　（明治二十八年）

恋をする猫もあるべし帰花　（明治二十八年）

金屏を幾所かきさく猫の恋　（明治二十九年）

里の子の猫加へけり涅槃像　（明治二十九年）

猫知らず寺に飼はれて恋わたる（明治二十九年）

のら猫の山寺に来て恋をしつ　（明治三十年）

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

行く年や猫うづくまる膝の上　（明治三十一年）

ちらちらと陽炎立ちぬ猫の塚　（大正三年）

真向に坐りて見れど猫の恋　（大正四年）

因みに、私は猫の句をよく詠む。某結社に入会して約十年になるが、その間、入選した猫の句は、三十句ほどある。でも我家は猫を飼っていない。隣の奥さんは猫大好きで、三匹を孫のように可愛がって、皆「ちゃん」付けで呼んでいる。家族を呼ぶときは呼び捨てである。挨拶など、家族に対してはぶっきらぼうであるが、猫ちゃんには優しく、愛情のこもった甘い声を掛ける。猫たちが外から帰ると、「お帰り、いじめられなかったぁ」「そこは暑いからこちらに来て水をのんだらぁ」という具合である。また、奥さんが買い物から帰ると、まず、猫ちゃんに「ただいま、お腹すいたぁ」「お八つ食べるぅ」と、猫ちゃんの機嫌をとる。

我家と隣の間に垣があるが、一メートルも離れていないので、よく聞こえてくる。特に夏場はお互いの窓は網戸であるから、聞きたくなくても耳に入ってくる。

その三匹は、昼夜を問わず、我家の庭をたびたびパトロールしてくれる。それはよいとしても、そのついでに臭い物を落して行く。でも、叱ることができない。四季にわたり私に句材を提供してくれるから。

「猫の恋」　田村　米生

ペルシャ猫顔に似合はぬ恋狂ひ

シャム猫の恋はしゃにむに相手追ふ

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

恋の猫年の差なんて気にもせず

三毛猫の恋の相手はＡ・Ｂ・Ｃ

うかれねこ猫待顔で目尻下げ

恋の猫また始まりし家出癖

猫の夫（つま）素知らぬ顔で朝帰り

猫の妻三下り半を噛み破る

猫さかる声は猫語の死ぬ死ぬか

恋の猫玻璃戸のくもり舌で拭く

吾輩も猫になりたき春の夜

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。